



Title	有島武郎のヨーロッパ紀行(五)
Author(s)	坂上, 博一
Citation	明治大学教養論集, 251: 87-102
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/10098">http://hdl.handle.net/10291/10098</a>
Rights	
Issue Date	1992-03-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

## 有島武郎のヨーロッパ紀行（五）

坂上博一

28 パリ

さていよいよベルギーを後にしてパリに入るのだが、三度も乗り換えるために、五時到着の予定は十時に変更、また「Baedeker ナケレバ猿ノ木ヨリ落チタルモ同様ナリ。」とも書いている。ベデカはドイツの出版業者カール・ベデカ（1801～59）の名から出たベデカ出版社発行のヨーロッパ各地の旅行案内書で、一八三九年「ライン河案内記」で好評を博し、各国の案内書が続刊されたものである。永井荷風も『ふらんす物語』の中の「墓詣」という文章で、モンマルトル墓地の樁姫のモデルの墓に詣でた時、二人の女から「君はよきもの持ち給へり。吾等は先づ、三人して案内記の地図を見るべしとて、左右よりわがベデカアを打ちひろげ、首さし伸して論ぜり。」と述べている。また寺田寅彦の随筆「案内者」には、日本人がいかにベデカを頼りにしているかが具体的に述べられ、若干皮肉まじりの批判が加えられている。有島のこれまでのヨーロッパ紀行も、かなりベデカに頼ってきたことは明白である。しかし恐らく寅彦が「案内者」で批判したような、例えば窓から眺める景色までベデカに頼るように、すべてをベデカの眼で見ているのではない、とは言うまでもない。

ベルギー語がようやくフランス語に変わる頃、有島の乗った列車には次々といろいろな階層の人々が乗りこんできた。それを観察する眼は正に作家の眼である。車掌は労働時間十一時間に対して月収二百フラン、妻子を扶養する苦惨が堪え難いと笑いながら語ったが、有島は「彼レハ常二不平スル楽道家ノ一人ナリキ。」と評している。日暮には隣室に一隊の兵士、有島らの室には四人の労働者が入ってきた。頭上には揮発性の少い一つの煙る油燈、労働者の服装は油じみた大黒帽に縞の見えぬ服に太いズボン。その様に有島は「カクテ我等ノ目前ニ Gorgy ガ小説ノ一頁ハ開カレタリ」と連想するのである。Gorgy は無論ゴリキーのことであろう。ゴリキーが日本で広く知られるようになったのは、明治四十三年十二月、「どん底」を小山内薫が「夜の宿」と題して自由劇場で上演して以来のことである。それ以前にも二葉亭四迷が「肖像画」（明30）「猶太人の浮世」（明38）「ふさぎの虫」「灰色人」（明39）などと訳して居り、また昇曙夢の評論「ゴリキーの傑作とその世界観」（明39・10）などもあったが、それ程評判にはならなかった。有島のゴリキーへの注目はかなり早いと言い得るであろう。処女小説「かんかん虫」などに与えたゴリキーの「チエルカッシ」などの影響は大きく、比較文学研究上の好題目の一たるを失わない。

それはともあれ、そのうちの一人の労働者の挙措がいたく有島の興味を惹くことになる。その男は拳を打ってフランス語で罵々と何やら罵声をあげるのである。意味は分からないにしても、その題目は政治社界宗教にまで互っているらしかつた。一種のデマゴークであるのだが、有島は快くこの一労働者の雄弁に聞き惚れて、彼に自信と純一を認め、「Dantonノ再生」を見ている。そのうち三人の労働者は下車して彼だけ残ったが、ふと隣室の兵士達の歌声に耳を傾けて立ち上がり、廠のような拳で破れんばかりに板壁を叩いてフランス国歌を唱い始めたのである。すると隣室でも忽ちそれに合わせて、期せずして大合唱が始まるというまことに得難い光景を目前にすることになる。正に樁事というべきであった。

堪え難い寒気の中、遂に夜十時、汽車はパリ北駅に入った。出迎え所には除隊になった兵士達を迎える者が堵をなしていた。それより直ちにニューホテルという古いホテルに入ったが、なかなか暖がとれず、寒き髓にしみ、「不平満腹寝二就ク」のであった。かくてパリ第一夜は甚だ不満のうちに過すことになった。

翌十二月三十日、日曜日の日記は「我等ガ苦闘ハ此日ヨリゾ初リケル」という不思議な書き出しで始まっている。このことは、この日の日記がかなり後になってから書かれたことを意味しているのではないだろうか。そのためか、パリ生活の不如意な感情が生のままいらだたく出ていのである。今後のパリ生活のためには、まず為すべきことは二つあった。一つは紛失したベデカを買戻すこと。もう一つはこの不愉快なホテルを変えることであった。とに角ホテルを飛出し、ストラスブール大通りを南下してノートルダムを過ぎ、ベデカを求めようとするが、日曜なので閉めている所が多く、巡査に手まねなどで尋ねてようやく店を見つけ、購入することができた。「カクテBadeckerハ我等ガ掌裏ノ珠トナリヌ」とあることによっても、その時の喜びは思い知られよう。

次にホテルであるが、これも狂気のようにあちらこちらのホテルやペンションを歩きまわったけれども、これと思わしいものは求めることが出来なかった。パリのすべてが腹立たしく、「女ノ事々シキヨリ男ノ風流ナルマデ憤リノ種ナラザルハナキ」とはやや異常の言である。その中であって「Same 河ノヤミ流レ早キ緑ノ色」だけが淋しい旅心を慰めてくれたのである。

有島のその後のパリ生活はどうなったか。日記はその翌年の一月二十五日まで中絶されているので、詳細について知る由もないが、一月二十五日の、既にパリを離れてロンドン滞在中に回想して書かれた日記では、幾度かホテルを変えてからオテル・デュ・ルウヴルに落着いたこと、最初に会った日本人は画家の「藤島氏」(武二であろう)であったことなどが記されている。藤島については、かねて壬生馬から聞き及んでいたので興味を抱いていたが、会ってみて、有

島は次のようになり彼を高く評価している。

「彼レノ形容思想ノ傾向ハ委シク壬生馬ヨリ聞キ得タレバ、我レハ氏ニ遇フヲ以テ最興味アルコトニ思ヘリ。彼レハ一個ノ天才ナラザレバ確カニ一個ノ芸術家ナリ。其眼ハ逸才ノ常ノ如ク輝クコトナケレトモ、其眉宇ニハ裕カニ空想ト把持ノ力籠レリ。美シトニハアラザレトモ特趣ナル厚キ唇ヨリ顎ニカケテ彼レハ云フ可ラザル charm ヲ有セリ。一方向ニ走レル強キ *ambition* ハ彼ノ性格ヲシテ引カアルモノタラシム。」

藤島武二は、明治三十八年以来二年間フランスに留学していたが、渡欧前既に東京美術学校西洋画科助教授であり、「明星」の表紙、挿絵、『みだれ髪』の装幀なども行ない、「天平の面影」「蝶」などのロマン主義画風により盛名を得ていた。慶応三年生まれで当時四十歳、有島兄弟とはかなり年齢の開きがあるが、壬生馬は後々までかなり親しくしていたようである。その人柄について、後年の有島生馬は次のように回想している。

「生活質素、早起の習慣あり。花卉を愛する事常人に過ぎたり。日常座右に花の絶えたる事なく、吾々と食事される時は必ず卓上に花瓶を持来られたり」

有島はその藤島にパリの美しい街路や繁忙な市街やルーヴル美術館などを案内されて行く。かくてパリ生活が始まったのである。

また到着翌々日の明治四十年一月一日には、グラントオテル・デュ・ルウヴルより家に手紙を出しているが、それによれば、三十一日には早速大使館へ行き、栗野大使に会っている。大使には既に父武の紹介状や有島兄弟あての手紙が届いており、更に千円の旅費も二三日中に届くことを知って、有島は父の配慮に深く感謝する。また今後の予定についても述べているが、それによれば、パリには十日ほど滞在看物してから壬生馬に別れて、单身ロンドンに出発するとうことになっている。またティルダからの葉書を受取り、有島の方からも返事を出しているが、一月十日の彼女あての

葉書には、ギメ博物館へ行き、日本関係の膨大なコレクションを見たこと、特に阿弥陀像に感心し、ヨーロッパの同時代のどの作品にも十分匹敵するように思われることなどが書かれている。パリにおいても、相変らず美術館めぐりに忙殺されている日々であつたらう。

ところで、一月二十五日の日記は次のような一種の都会論で始まる奇妙なものである。

「我が小ナル *cosmos* ハ大ナル都会ニ入ル毎ニ其秩序ト肅整トヲ失ヒ去ルナリ。人ト云ヘルモノモ人ノ集合体ト云ヘルモノモ其個性ヲ發揮シテ見ラルミハ都会ニ於テニアラズ。田園ニアリテハ人ハ自然ノ隷属者ナリ。都会ニアリテハ人ハ人文史ノ隷属者ナリ。自然トノ交渉ニアリテハ人々各与ル所アリ。人文史トノ交渉ニ於テハ即ち然ラズ。史上ニ代表セラル可キ若干少数ノ頭顱ヲ除クノ外ハ万人千万人人文史トノ交渉ヲ有シナガラ宛ラ飛塵破沫ノ如クシテ去ル。此ノ如キ多数群集ノ喧々囂々ノ中ニ没入シ、此ヨリ一個ノ秩序ヲ索出セントスルハ殆ンド不可能事ナルニ似タリ。過去ヲ顧ル時我等ハ其跡徹ヲ追憶シ、都会ノ大ナル力ト其活動ノ方向トヲ觀取シ得ザルニアラズ。サレトモ目前ニシテ都会ニ接スレバ宛ラ一個苦悶セル *giant* ヲ見ルノ想アリ。何ノ苦悶ゾ。何ガ故ノ苦悶ゾ。其苦悶ヲ医シ得ルハ何ナル可キゾ。絶テ知ルニ由ナシ。 *Michael Angelo* ノ沈痛ナル画図ヲ展キ見ルガ如シ。」

自然に包まれた田園に対して、人工の都会批判というより呪咀である。一月十五日のティルダにあてた手紙にも、大都会の生活は馬鹿げている、心からそれを憎むというようなことが記されている。ここで想起されるのは、それより数年前、ロンドンの煤煙に心身共にまみれ、スコットランドの自然の中でようやく人間性を回復した夏目漱石のことであるが、有島のバリ体験に一体何が起こったのであろうか。これも知る由がないが、想像できることは、パリ、ロンドン彷徨の心労と共に、ルーヴル美術館などでミレーの絵に接して強烈な感動を受けたことによる影響があるのではないかということである。それは帰国後の大正六年三月「新小説」に発表した六十枚以上に及ぶ長大な「ミレー礼讃」によ

って証されるのである。

ミレーは明治三十年代に黒田清輝や高山樗牛、岩村透などによって紹介されて以来、次第に日本人にも親しまれるようになり、大正三年にはロマン・ロランの『ミレー評伝』が森口多里によって初訳刊行されてミレー熱が高まって行ったが、有島の「ミレー礼讃」はミレーの伝記とミレー自身の言葉、ミレーの意義を感動こめて語った出色の本格的評伝である。特にミレーの自然に対する態度などは、有島自身の自然観を語っている観がある。この中で有島は都会的文化の罪過を徹底的に批判し、文化が生活を出し抜いて先走りしたのは、「人間の中に潜むイヴがアダムを出し抜いたからだ」という警拔な譬喩を用いて、イヴが如何にしてアダムを奴隸化し、近代文化の具体的表現としての都会的生活を作り上げていったかの跡づけを行なっている。有島によれば、田園を作ったのは人間の中に潜むアダム即ち男であり、都会を作ったのはイヴ即ち女だということになる。ミレーはそのような都会的文化の本質を見抜き、田園に生活の中枢を求め、悲惨な人生の生活のどん底に「寛大と、勤勞と、平和と、resignationと、愛の根とを見出し」、「この深みから芸術を生み出したということになるのである。この評伝で有島は多くのミレーの代表作に言及しているが、それらは複製のものもあるが、やはりルーヴルなどで実物に接しての感動が底流にあることは疑い得ない。パリ体験の最大のものの一つは疑いなくミレー体験にあったであろうし、またそのことがパリという都会に対する複雑な気持を醸成させたということになるであろう。

ところで、パリ滞在中にミレーに勝るとも劣らず、深甚な感動を与えられたもう一人の偉大な芸術家があった。オーギュスト・ロダンである。帰国後書かれた「叛逆者（ロダンに関する考察）」（明43・11「白樺ロダン記念号」）や「ロダン先生の芸術の背景」（大6・12「中央美術」）によれば、リュクサンブール美術館で「黄金時代」「セント・ヨハネ（聖ジョン）」「ダビデ」の三作品とパンテオンの階段の下に立っている「考える人」を見たのであった。あるいは見

たに過ぎなかったと言ふべきであろうか。しかし勿論印象の強烈さは見たものの数に比例するわけではない。このことをきっかけにして、有島のロダン傾倒は帰国後ロダンについて多くの文章を書かせるまでに深められて行くのである。とりわけ「叛逆者」は有島の芸術観を確認する上でも重要である。

「叛逆者」は「Stationary Period」とか Dark Ages とか云ふ名で知られた欧州史上の一時期は、新しい意義を提げて、現代文明の核心に萌芽を出し始めたと私は信ずる」という堂々たる調子で、これまでアメリカで学び、イタリヤの中世寺院などを見て確信を深めた中世讚美から始まる。そして文芸復興期以後、一旦「死んだと思はれた中世紀的精神の閃光が、近世史の此所彼処に現はれ出し」た。「近世芸術の勃興は文芸復興期―延いては羅馬風の芸術家の個性と自然とを無視した模倣芸術に対する独創的ゴシック芸術の反抗と称していふ」と中世ゴシック文化の復権を論じ、ロダンをゴシック精神復活の潮流の中に位置づけるのである。有島はゴシック芸術の一特色を「醜の美化」或いは「醜と美に対する標準の改造」という点に見ているが、ロダンの芸術は、正にそのようなゴシック的傾向を代表するようなものである。そしてゴシックを選ぶのは、敢て時代の叛逆者たることであり、ロダンは、イブセン、トルストイ、マナー、ゼザンヌ、ホイットマンなどと共に叛逆者の頭目であらねばならぬと結ぶのである。「白樺ロダン記念号」ということもあってか、いささか気負い過ぎた感もあり、ルネッサンスに対する過小評価も問題にならうが、有島のヨーロッパ芸術観の集大成或いは総決算とも言ふべき評論であらう。

ロダンは明治三十年代から一部にその名は知られていたが、その普及紹介に最も大きな貢献をしたのは「白樺」同人であった。「白樺ロダン記念号」の編集後記によれば、志賀直哉は早くも明治三十八年、学習院高等科在学時代にアメリカの友人から送られてきた美術雑誌の写真と紹介文によってロダンを知り、それをきっかけにその名は友人間に知られて行つた。その後明治四十一年、滯仏中の壬生馬が既に帰国していた有島のもとに送ったユディス・クラデルの「ロ



ダン評伝」が同人たちにロダン熱を生じさせたと言われる。その結晶がこのような「ロダン記念号」を生むことになったのである。ロダンの生誕七十年を記念してのことであった。この号には有島兄弟の他、斎藤与里、高村光太郎、永井荷風などロダンの作品を目のあたりにした人々の文章も掲載されたが、その中にあっても、有島の「叛逆者」はまことに堂々としていて、集中の白眉とも言うべきものであった。以て有島のロダンに対する熱烈な敬愛の念を知り得るのである。なおこの「ロダン号」発刊を機縁として「白樺」同人とロダンとの文通が始まり、ロダンの要望で送った浮世絵三十数枚の返礼として、ロダンからブロンズ小品三点（「ロダン夫人の像」「或る小さき影」「巴里ゴロッツキの首」）が送られて来たのであった。その時の同人たちの欣喜雀躍ぶりは、武者小路実篤や柳宗悦の書いた「白樺」の「六号雑誌」や武者小路の小説「或る男」に生き生きと描かれている。なお「白樺」はその後も大正七年一月号を、その前年十一月に死去したロダンを悼んでの追悼号として刊行している。

## 29 アミアン

一月十七日、いよいよ有島は良き伴侶であった壬生馬と別れて、単身イギリスに向うことになる。壬生馬はパリ北駅まで見送りに来た。気がめいる別れであった。車窓からのフランス北部の景色はすばらしく、ミレーが描いた風景画と寸分違わぬ光景であった。芳しい草に蔽われた野原が波のように高く低くうねり、牛や羊が群れをなして餌を食べているという、わびしいが落ち着きのある風景であった。

昼近くアミアンに到着。ここの大聖堂はノートルダム大聖堂と共に、かねがねゴシック美術に傾倒していた有島にとって大きな感動を与えた。但しそれは息苦しい感動だったようである。帰国後の「芸術についての一考察」（大9・4「中央公論」）の中で、有島はアミアン寺院について次のように書いている。「それは建築美術の完璧と称へられてゐる

ものゝ一つであるけれども、この偉大な建造物を仰ぎ見て、人が受ける感じは瞬時も動きやまぬ息苦しい動揺感ではないか。」要するに有島は、敬愛するゴシック建築に「個性の煩悶そのもの」を見るのである。そこに有島の芸術鑑賞における文学的感性のあらわれを見ることができるのである。

一月十九日のロンドンよりティルダへあてた手紙には、アミアンの大寺院と共にビュヴィ・ド・シャヴァンヌのフレスコ画法への関心が語られている。シャヴァンヌについては更に二月二十一日のティルダたちの仲間富士山クラブへあてた手紙にも、シャヴァンヌの絵の大胆なところに深くひかれ、小さな作品より大きいキャンバスほど生き生きしているとその魅力が語られている。そのようなアミアンは滞在したい気持を起こさせる程の場所であった。

有島のヨーロッパの旅もいよいよ大詰めを迎えることになる。一月十八日、ロンドンに到着。翌十九日のティルダへの手紙にはロンドン到着時の心境が感傷的に記されている。晴れて涼しい夕方の上空に三日月がおぼろに輝いている。それをじっと見ているうちに陰鬱な物思いに捉えられ、無情な汽車に悩む心を揺られながら到着したのである。ホテル探しは難渋を極めたようで、ロンドンの端から端まで二十数軒探しまわり、ようやく決めることができたのであった。一方、英語が自由に通じる国に来ての安堵感もあったらしく、一月二十三日の家への手紙には、「英語之自由なる国に参り二三旧知之友にも面会到候得者先故郷に近き候様なる心地致申候」とある。またこの手紙には、二月二十三日にイナバ丸で帰国する予定であることも報じられている。約一ヶ月のロンドン滞在である。その間大英博物館をはじめとする博物館美術館めぐりや図書館での勉強が主要な日課であったろう。ここでの収穫は、初期イギリス肖像画やラファエル前派の魅力の発見であった。二月十一日のティルダあての手紙には、「ロセッティのローマン的な情熱、バーン・ジ

ヨウンズの憂鬱な美しさ、クロウムの超絶的な態度、レイノルドの重厚な共感、コンスタブルの新鮮な力強さ（小玉晃一訳）などの魅力をあげている。しかしどういふわけか、夏目漱石にも強い印象を与えたターナーの名はない。更にテムズ河畔の散歩、幽霊が見られそうなウエストミンスター寺院の印象が語られ、また「時には博物館へ行き、自然の精巧さと美しさの果てしない資源に驚き」、「時には教会で、過ぎ去った世紀の信仰がもっと進歩した別の形態の信仰を消すためにのみ燃えている」（同訳）など、ロンドン生活の一端が物語られるのである。

恐らく大英博物館へはしばしば足を運んだことであろう。後年有島は、大英博物館の目玉ともいふべき「フイディアス（と称せらるゝ）の浮彫」を見ての感想を述べている。これは古代ギリシャのアテネのパルテノン神殿を飾った彫刻であり、駐トルコ大使エルギン卿によって持ち去られたところからエルギン・マーブルズの名で知られるものであるが、有島はこれを「観る人に流滴の不幸悲慘を感じさせる作品」（「美術鑑賞の方法に就いて再び」大9・4「雄弁」）の代表例としてあげているのである。この評論はその前に書かれた「美術鑑賞の方法に就いて」（大9・1「太陽」）における「各国の代表的芸術品をその仮りの宿りからその生まれ故郷なる本国に返済」せよという主張を、本間久雄の疑問に答える形で書いたものである。即ち有島は、大英博物館の浮彫は「霧と煤煙によつて黝んだ空気」の中で「冷たい石畳」の上に配列されてあるが、彫刻された馬や人は「希臘の明瑩な空気」を慕っているのではないか、古い大理石は悲しく「捕虜の境涯の嘆き」を訴えていると見るのである。これは今日でもしばしば取上げられる問題で、一朝一夕で片づく問題ではないが、有島が芸術品を静止した無機的なものとしてではなく風土と密着した有機的なものと捉えていることをよく証するのである。但しこの評論における主張は過去における代表的作品についてであり、現代の次第に郷土を超越して世界的になる傾向を有している美術品についてではない。有島は芸術の普遍性やミリュウから開放された芸術家の個性について、無論否定しているわけではないのである。

ところで、有島のロンドン滞在にはもう一つ大きな目的があった。ぜひ会わなければならない人物がいたのである。その人物こそ無政府主義者の領袖クロポトキンであった。さきにも引用したが、後年有島は久保正夫訳の「聖フランシス『完全の鏡』の序文」(大8・3)の中でも、「私が欧州にあわたぶしい半年程の旅をした時、是非とも遇ひたいと思つた人はクロポトキン、是非とも訪れたいと思つた土地はアッシジでした。」と述べている。アッシジについては既述したように、聖フランシスの聖地として存分に思い入れをこめて徘徊して心に刻みつけたわけであるが、クロポトキンに会うことは、後の半分の課題を果たすことにもなるのである。このことは、この前年、明治三十九年四月から八月にかけて行なわれた徳富蘆花における聖地パレスチナ巡礼とロシアの寒村ヤスナヤポリヤナにおけるトルストイ訪問の意義にも相当するであろうか。

有島がクロポトキンに親しむようになったのは、帰国後の「クロポトキンの印象」(大5・7「新潮」)によれば、明治三十七年頃であつたらしい。当時有島はしきりにゲオルグ・ブランデスのものを愛読しており、おぼろげにロシアにおける現在の社会状態にあき足りない様々の主義に好奇心を抱いていたが、そのブランデスがクロポトキンの自叙伝の序を書いていることを知り、それを読もうとしてクロポトキンの著書に接し、頭が上らぬほど感心してしまつたということである。この自叙伝とは、一八九八年九月から一八九九年九月まで一ヶ年間アメリカの月刊誌「アトランティック・マンズリー」に掲載された「ある革命家の自叙伝」を加筆して一八九九年十月に単行本にまとめられた英語版の同名の書である。この書は直ちに熱狂的な歓迎を受けて、フランス語版、ロシア語版が相次いで刊行されたが、有島の読んだのは英語版であろう。ブランデスはこの英語版にクロポトキンのすぐれた人柄について懇切な解説を付している。特に有島の敬愛するもう一人の人物、トルストイと並べて顕彰している点など、クロポトキンへの敬愛の念を深めたに違いない。

有島がこの書を読んだ明治三十七年と言えば、当時二十六歳、アメリカ留学二年目に当たる。この年二月に日露戦争が勃発、これまでのキリスト教信仰に懐疑を抱き、フランクフォードのフレンド派の精神病院の看護夫となって働くが、次第に不安を感じて職を辞し、ハーバード大学選科に入ってモア博士の中世建築史に興味を抱き、ブランドス以外にもホイットマンやツルゲーネフに傾倒し始めた時期であった。またハーバード大学院で社会主義者金子喜一を知り、影響を受けるのもこの頃であった。要するに有島の精神の激動期であったのである。ともあれ、クロボトキンに対する敬意は以後加速度的に増大し、その後彼の著書をあれこれ漁る中に敬意は懐かしさに変わって行き、イギリスに渡る機会もあつたらぜひ訪問したいと思いつめるようになったのである。

クロボトキンの名は、日本ではかなり早くから知られていた。自由民権運動が高潮期を迎える明治十年代の中頃にはクロボトキンにも関わりのあるロシア・アナキストの活躍ぶりが数々の政治小説や伝記、歴史書の形で刊行されたが、その中でも特に宮崎夢柳の「鬼啾啾」はクロボトキンの監獄脱走の顛末をドラマティックに描き、人々に強い印象を与えた。その後もクロボトキンの名は社会主義者の中で親しまれていたが、その思想が本格的に紹介されるに至ったのは、明治四十年に入ってからのことである。山川均の回想によれば、明治四十年十二月六日に、大杉栄がクロボトキンの代表作『麵麩の略取』の第三章「無政府共産制」を「現代社会の二天傾向」と題して講演したのが最初ということである。しかし大杉は、更にその前からクロボトキンのものを濫読し、明治四十年三月には「平民新聞」にクロボトキンの「青年に訴ふ」を訳して起訴されて入獄したのである。『麵麩の略取』はその後幸徳秋水が明治四十二年一月に全訳し、ひそかに出まわってアナキストたちに大きな影響を与えることになる。その幸徳は渡米以前の明治三十八年五月に、後に有島がクロボトキンから直接寄贈される『田野、製造所及工場』（『田園・工場・仕事場』）を読んでいたらしく、渡米後更にアナキズムに傾倒し、帰国後「日刊平民新聞」の創刊号（明治四十年一月十五日）に「余が思想

の变化」を発表し、アナーキストとしての自己宣言をするのである。また幸徳はその頃からクロボトキンと直接に文通を始めてもおり、処刑直前弁護人にあてて獄中で書き綴った「陳弁書」では、クロボトキンによってアナーキズムを説明している。以て幸徳にとってクロボトキンの感化がいかに大きかったか知り得るのである。なおその後クロボトキンは石川啄木にも大きな影響を与えているし、大正九年には東大助教授森戸辰男が「クロボトキンの社会思想の研究」を発表したことによって起訴され、いわゆる森戸事件を惹き起こすきっかけになったことは周知の通りである。

いずれにしても、有島のクロボトキンに対する傾倒は幸徳秋水や大杉栄と匹敵するほど早かったのである。そのクロボトキンとの会見は明治四十年二月に果された。この時の印象を、有島は後に「クロボトキンの印象」、更に「クロボトキンの印象と彼の主義及び思想に就いて」(大9・1「読売新聞」)でかなり詳細に回想しているが、後年に至るまで強い印象を与えられた出来事であった。但し前者と後者では、会話の内容、順序などに若干の食い違いが見られる。

その時期のロンドンには濃霧と寒気に鎖されて、真昼にも電灯を点さねばならぬ不愉快な季節であった。有島はクロボトキンに直接に面会を申しこみ、承諾の返事を得て出かけて行くことになる。場所はロンドンの郊外で汽車に乗って行く。降りた所は工場地が市街地が変わったような感じがさした町であった。その広いペーヴメント添いの三軒続きのアパートの中央の家にクロボトキンは夫人と共に住んでいた。クロボトキンは当時六十五歳、有島はその風貌と会見の様を「クロボトキンの印象」で次のように感激して描き出している。

「豫て写真にて見覚えたる通りの容貌に候。驚くべく広き額、白く垂れたる鬚髯、厚みある正しき輪郭の鼻眼鏡の奥にありて輝く灰色の眼、写真にて窺ひ得ざりしものは健康と清潔なる生涯と裏書きするつや／＼しき皮膚の色、荒海の唯中に立つ巖の如く六十幾年の辛酸艱苦に鍊へ鍊へし広やかに厚味ある胸を掩ふ単純、他の奇なき平民の服、挨拶の手を堅く握られて私の眼は端なくも涙にうるほひ申し候。」

クロポトキンは日本における社会主義運動の現状などを事細かに尋ね、また堺、幸徳はどうしているかなどと消息を聞いたりした。そして天井までぎっしり本が詰っている二階の書齋に案内し、「相互扶助論」に対する説明をしてくれたりした。有島は「従来の凡ての境遇凡ての伝説より切り放され、英国に居るといふ事も忘れ、日本人なる事を忘れ、この書齋の何処如何なる地点にあるやも忘れ果て、老親の膝下にある柔順なる小児の如くに、その穏やかなる慈愛にあふれたる言葉に聴き入」るのであった。そしてクロポトキンは著書“Feids-Labor and Workshop”（『田園・工場・仕事場』）にサインしてからどれでも自由に翻訳してよいとの許可を与える。有島のクロポトキンに対する敬愛の念が伝わったのであろうか、大変な好遇と言うべきであろう。その後家族ともどもの心のこもった食事の供応を受け、トルストイのことやカナダで新しい共産村を作っていたドハポール（ロシアの非戦論を唱えた聖霊否定派）のことなどを話題にしたりして、二時頃この懐しい家を辞去するのである。帰りの車中クロポトキンの多事多難の一生を涙を浮べながら回想するのであった。

ところで、この時、有島がクロポトキンから幸徳秋水にあてた手紙を託されたことと従来から言われているが、有島は政府当局への配慮のためか何も書いていないのである。確証はないにしても、この時期の幸徳のアナーキズムに関する言動、クロポトキンとの文通状態からして有り得ることである。但し塩田庄兵衛編の『幸徳秋水の日記と書簡』に収載されている幸徳の書簡で、クロポトキンから手紙が来たことを報じているものは、獄中の石川三四郎にあてた明治四十年五月十日と七月七日の日附の二通のみである。前者はクロポトキンから手紙が来たということだけを報じてあるだけだが、後者は次のようにかなり重要な意味を持っている。

「今朝クロポ翁より青年論の為に諸君の奇禍を買へるを哀しみ、獄中なるブレイヴ、カムレーズに親厚なる友愛の敬意を表しくれと申し来れり。且つ麵麩の勝利の翻訳承諾をも快諾し来れり。翁は深く日本同志の辛酸を感謝せる旨

を極言せり。」

前記の大杉の筆禍事件に対する同情の念を表わしているのであるが、クロポトキンの日本のアナキストへの親近感がよく伝えられている。しかしいずれにしても、クロポトキンから直接幸徳に送られてきた感して、有島経由のものとは思われない。有島に託された手紙があったとすれば、その行方はどうなったのであろうか。

クロポトキンの無政府主義については、有島は、「コムユニニティーを小さなものにして其の各々が共産の形をとる」ものだと理解しながらも、そのような理想は全世界がそうならなければ出来ないことで、たとえロシア一国がそうなくても、他の国が今のままでは行われまいだろうと懐疑の念を抱いている。またそのような共産社会をもたらず手段として階級闘争を是認するところに矛盾を見るのであるが、有島のクロポトキンに対する敬意は一貫して変わらなず、発表年月、発表誌名ともに不明であるが、作家の愛読書と影響された書籍についてというアンケートの中でも、影響を受けた書として、ホイットマン、聖書、トルストイ、カーライル、ベルグソンと並んでクロポトキンの名をあげ、また別のアンケートでは、クロポトキンの諸作よりは「正しき生活」を学んだと答えているのである。大正九年に森戸事件が起ると、有島は森戸に裁判の勝利を信ずるようにと激励の手紙を書き、法廷にも何回か傍聴に出かけているが、これもやはりクロポトキンへの敬意のしからしむるところであらう。

しかしクロポトキンの影響として特に重要なのは、高杉一郎氏も指摘しているように（岩波文庫「クロポトキン」『あの革命家の手記（下）』解説、昭54・2）、大正十一年一月に「改造」に発表した「宣言一つ」及び同年八月の北海道狩太の四百五十町歩の有島農場の解放への関わりであろう。「農場解放顛末」（大12・4「帝国大学新聞」談話筆記）という文章の中で、「アメリカにゐる時クロポトキンの著作などに親しんだことから物の所有といふことに疑問を抱かされたのであります」と述べていることによって、クロポトキンの影響が有島にとって、終始いかに大きなものであ



ったかが分かるのである。またこの文章の最後で、この農場が「四分八裂して遂に再び資本家の手に入ることを残念だが観念してゐる」と悲観的観測を述べているが、これについて高杉氏は「これを話している有島の頭のなかには、十四年まえロンドン郊外にクロポトキンを訪ねたとき、彼がカナダに移住したロシアの聖霊否定派たちの共産村が成功することを願って情熱的に話していた姿と、その後この共産村が周囲の資本主義社会との交渉の過程で崩壊した事実とがよみがえっていたのではあるまいか」と述べているが、まことにその通りと思われる。ただし、有島のこの悲観的予測は幸にも適中しなかった。発足した有島共産農園は戦争中の様々の苦難にも耐えて、戦後の農地解放の時期までよく有島の意を体して存続したのである。今日旧狩太、現ニセコの有島記念館に残されている数々の資料はそれを雄弁に物語っている。

ともあれ、クロポトキン訪問により、有島の懸案は成就した。たとえこのヨーロッパ旅行で、富貴を弊履の如く捨て去り無一物の生活を実践した聖フランシスの聖地アッシジを踏まなくても、また私有財産を否定して戦ったクロポトキンに会わなくても、有島の農場解放は実現したかもしれない。しかし、その場合における有島にとっての内面的意義は大きく異なったであろう。

二月四日にはパリから壬生馬がやって来て十九日まで滞在、再び兄弟水入らずの生活に入る。そして遂に二十三日、ロンドン港から因幡丸に乗船して帰国の途に就くことになる。ティルダにあてた手紙によれば、「イギリス海峡ではここ二、三日暴風が吹き荒れており、ロッテルダムの近くでは一隻の船が難破し、その結果、数百人が溺れ」という状況であった。かくして五ヶ月余に及ぶ有島武郎の稔り多いヨーロッパの旅は終わったのである。

(完)